

『三国史記』「地理志」の高句麗地名漢字

—おもに日本語との比較による考証（三）—

高木雅弘

はじめに

これまで、『東洋文庫書報』第47号〔2016〕、第48号〔2017〕の二回にわたり、高句麗の地名の漢字について、いくつかの提案をさせていただいた。47号（初篇）では、主にその正誤や略体字、訓読などについて論じた。48号（続篇）では、漢字そのものの分析以上に、音韻変化に重点を置いた分析になっている。

今回（第三篇）は、前回の補遺を兼ねて、音韻面の分析を中心に新しい提案をさせていただこうと思う。特に「音位転換」は、高句麗語の音韻変化の重要な部分を占める要素となっているにもかかわらず、これまで注目されてこなかった点で、さらに比較例を加えて説明する必要性を感じたのである。また、先学の研究の中で‘定説化’されてきた説のうち、音韻対応関係の規則性に疑問点があるものについても取り上げることにした。

今回も前回と同じく、使用した東洋文庫所蔵の資料は、以下の通りである。煩を避けるため、それぞれ①、②、③の刊本のように呼ぶこととしたい。（）内の数字は東洋文庫蔵書の請求記号である。

- ①（VII-2-134）『三国史記』五十卷〔高麗金富軾奉宣撰、朝鮮刊【太祖三（明洪武二十七）年跋】鑄字印補寫〕
- ②（VII-2-804）『三国史記』五十卷〔高麗金富軾奉宣撰、昭和六年、京城、古典刊行会景印〕
- ③（VII-2-1018）『三国史記』五十卷・附『三国史記異體字類』〔高麗金富軾奉宣撰、日本坪井九馬三・日下寛校、大正二年刊、東京、文科大学史誌叢書之一〕

今回も巻数のみを掲げたものは、原則的に『三国史記』の巻数（例、

卷第37)を指している。高句麗語と日本語の比較例を示す場合は、高句麗語を「高」と、(上代)日本語を「日」と略称することとした点は、これまでと同じである。

不等号の記号は、開いている側が古い形で、閉じた側が新しい形であることを示し、ローマ字表記の左上のアスタリスクは、理論的に再構された音であることを示す(例、「奈兮」*nahe < *lahi < *θila《白》)。また参考資料について、前二回のもとの重複するものについては、今回は割愛させていただいた。

1. 母音の割れ

「斬」《根》

卷37の「地名表」によれば、《根》をあらわす高句麗語は「斬」camといったことがわかる。

楊根縣、一云去斯斬。(楊根縣、あるいは「去斯斬」といふ)

高木根縣、一云達乙斬。(高木根縣、あるいは「達乙斬」といふ)

これは、ギリヤーク語(またはニヴフ語)の ʃamy《根株》と比較されている⁽¹⁾。これは、日本語「ネ」《根》とは全く対応していないように見える。ただし、「斬」が「漸」cjəmの略体字であれば、日本語の「ツマ」《端、袂(=着物の裾の両端)》と対応する可能性がある。さらに、「ツマ」に《屋根の軒の端》という意味があることを考えると、本来は《下の端》という意味になると考えられる。

「斬 (<漸)」cjəm < *ciam < *t'eam < *tumá

これと同様の音韻変化(*CuCá > CjaC ~ CjəC : Cは子音)を経たものはいくつかあるが、二音節語の後ろの母音にアクセントがあったために、第一音節の母音の弱化とともに、うしろの母音の影響をうけて‘音の割れ’が生じたものと考えられる。

高、「若」njak < *neak < *nuká《頭、首》:日、「ヌカ」《額》

高、「滅烏」mjər.o < *mear.huo < *murá+ku'a《駒(<馬・子)》

:モンゴル語 morin < *murin (< *muran?)《馬》

中期朝鮮語 mʌl 《馬》の形を考慮に入れれば、高句麗語は *mjʌl を復元できるかもしれない。朝鮮語では‘わたり音’の j が消滅している分、高句麗語よりも改新が進んでいるように見える。同様に、「別」pjəl 《重》も中期朝鮮語 pʌl との比較から *pjʌl のような語形を再構し得る。この点を考慮に入れれば、「漸」cjəm も *cjʌm の形を再構できる。

なお、日本語の「ウマ」(あるいは「ムマ」< *Nma) 《馬》は古代漢語からの借用で、高句麗語とは直接対応しない。原始漢語が *mra のような祖形を再構できれば、高句麗語の祖形 *murá に接近するが、二音節語の方がより原初的な形であろう。

他に、《逢う、迎える》を意味する「伯」pʌjk / mʌjk (日本漢字音の異音では「ヒャク」「ミャク」と日本語の「ムカへ」(<向か・合へ)《迎》の「ムカ」もとりあげてもいいかもしれない。

また、日本語の「ツ」(< tu) が規則的に高句麗語の c に反映されていることは、これまでも述べてきた通りである。

高、「～次」*+c 《(接尾辞)～の》: 日、「～ツ」《(連体格助詞)～の》

高、「租」co 《鶻鶻 (=フクロウ)》: 日、「ツク」《木菟 (=ミミズク)》

日本語の「ネ」の音は、上代語の段階で、すでに「甲類」(ne) と「乙類」(në) の区別が失われているが、《根》の場合、接頭辞「サ～」が付加された「サネ」《真、実》の異形に「サナ～」があることから、日本語の形は「エ列乙類」の「ネ」(< *në < *naj) にさかのぼる可能性が高い。これは、「土壤 (つち)」を意味する「ナ」に「ウ」《得 (= 手に入れる、身につける)》の未然・連用形「エ」(< *aj) という要素が付加されたものか。

*na+aj > *n·aj > *në > ne

ちなみに、高句麗語の「内乙」(= *nʌl) 《沙》も *naj のような形にさかのぼり得るが、これは日本語の「イナ」ina 《砂》と対応する祖形が音位転換したものであろう。その異形「内尔」は複数か、集合名詞の形をあらわしたのものかもしれない。

「内尔」*nʌ[n]ni < *nʌlni < *nanil < *na·nʌlj < *naj+naj < *ina+ina

2. 重訳型地名（補遺）

「息」《土》

「息」の音読形 sik を中期朝鮮語 hɛlk 《土》と比較する意見がある⁽²⁾。hɛlk という形以外に hilk という形もあるが、sik とはかなり距離があるように見える。その点は、モンゴル語の sirugai 《塵、土》との比較も同様である。

土山縣、本高句麗息達。（土山縣、もと高句麗の息達〔なり〕）（巻第35、漢州、取城郡）

そもそも、これは統一新羅時代の改名形であり、巻第37の「地名表」で対応する部分は次のように出ている。

今達、一云薪達、一云息達。（今達、あるいは「薪達」といひ、あるいは「息達」といふ）

「達」が《山》を意味することは、他の多くの例でも明らかであるが、「息」が《土》を意味するかどうかは、「地名表」だけでは判断できない。一方、「息」には「乃」という訓もあったことがわかっている。

漢城郡、一云漢忽、一云息城、一云乃忽。（漢城郡、あるいは「漢忽」といひ、あるいは「息城」といひ、あるいは「乃忽」といふ）（巻第37、「地名表」）

上の例では、「漢」についての訳語は不明であるが、「忽」が《城》を意味することばであることは問題ない。そして、《息》が「乃」と読まれていたことがわかる。もし、《土》を意味する「息」が訓読で「乃」 nɛj（修正形 *nɛ）と読まれていたのであれば、まさに《壤》を意味する「内」 nɛj（または「奴」 no）と発音・意味が共通ということになる。

高句麗語で《土》と《壤》を厳密に区別していた証拠は、ほかに見当たらない。高句麗の建国伝説に出現する「多勿」《復舊土》の「多」 ta 《土》も、その非鼻音的表記であろう。「～勿」 +mil 《復旧（する）》

は、上代日本語の「ミ・ル」《廻（＝めぐる）》の語幹「ミ」*mī < *mōj*（「モ・トホ・ル」*mō+tōfo-ru*《めぐる、まわる》を参照）と対応し得る。

また、「息」には《いき》以外に《生む、生まれる》という意味があるが、「地名表」の例から「乃」**na*が《息（＝生まれる）》を意味したとすれば、上代日本語の「ナ・ル」《生まれる、成る》の語幹 *na-* と対応し得る。なお、日本語の「ナマ」《生》（沖縄語「ナマ」《今》）とも関係があるかもしれない。

さらに、《今（いま）》を「薪」*sin*（＝*çin / jin*）と言ったのであれば、モンゴル語 *sine*《新しい》に酷似しており、地理的・時代的に見て鮮卑語からの借用の可能性もある。これらの例も、同一の地名に複数の解釈が存在する‘重訳型の地名’の中に含めることが可能であろう。

3. 音位転換（補遺）

a. 「加火」《唐》

国名《唐》をあらわすことばである「加火」は、どのように分析できるのであろうか。

唐嶽縣、本高句麗加火押。憲徳王置縣改名。今中和縣。（唐嶽県、もと高句麗の加火押〔なり〕。憲徳王、縣を置き名を改む。今、中和縣〔なり〕）（卷第35、漢州、取城郡）

「押」*ap*（**jaba*）《嶽》が日本語の「ヤマ」《山》と対応する点は問題ない。「火」は、新羅の本土に近い地域の地名では、「屈火」を「屈弗」*kul.pil*のように、*pil* と訓読した例が見られる。もし、「加火」を **kapil* と読んだ場合、**kapa.ra* か **kapaj* のような祖形にさかのぼり得る。

これは日本語に対応するとすれば、「カハ・ル」《変わる、代わる》の未然形「カハ・ラ」か、その他動詞形「カフ」の未然・連用形「カヘ」（*<kafē*）の形に酷似しているが、意味的には解釈しがたい。また、その他動詞形「カハ・ス」《交、易》は、高句麗語の「馬」*ma*《買》と対応すると見られる（後述）。

一方、「加火」が ka.hwa と音読されたとすれば、hwa.ha 《華夏 (=中国)》の音位転換形、ha.hwa の頭子音 h が k に‘修正’されたもののように見える。高麗時代の改名形「中和」cuŋ.hwa も「中華」の音に近い(朝鮮漢字音ではほとんど同じ「중화」)。

ただし、h が k に変化した例は他に知られていない。おそらく hwa.ha の h は、声門摩擦音ではなく、軟口蓋の摩擦音 x (喉の奥から強く出す「ハ行」の音)に近い音だったのではないだろうか。それが同じ軟口蓋の破裂音 k に近い音として認識されていったのかもしれない。

*xwa.xa 「華夏」 > *xa.xwa > *ka.kwa > ka.hwa 「加火」

言うまでもないことであるが、日本語の「カラ」《唐》は本来、朝鮮半島の東南部・南部にあった国、あるいは地域の名前(「加羅」)が起源であり、“唐”とは(おそらく“漢”とも)無関係である。日本列島に最も近く、大陸につながる朝鮮半島の地名が、時代とともに中国大陸の国名にまで拡大解釈されたものという解釈で、何ら問題ない。

b. 「馬」《買》

高句麗地名の「買」mɿ (修正形 *me) の音は、日本語との比較を通じて *mi のような形にさかのぼると考えられるが、音ではなく《買う》という意味で使われている例もある。

買省郡、一云馬忽。(買省郡、あるいは「馬忽」といふ) (巻第37「地名表」)

「省」sjəŋ (「城」と同音) が「忽」とは別の《城》をあらわすことばである点は問題ない。「買」と「馬」ma は頭子音(声母)が共通であるが、韻母の部分(.ɿ / .a)が異なる。「忽」が《城》の訓をあらわしていた以上、「馬」も《買う》の訓をあらわしていたと見た方がよさそうである。「馬」は、単音節語で a を保存している点を考えると、本来は二音節だった可能性が高い。

ところで、高句麗語の m が日本語の「ハ行」の音 (< f < *p) と対応しているものがある。

高、「~勿」+ mɿ < *+Nbal 《梁》：日、「ハリ」《梁》

高、「買尸」^{*}mel < ^{*}Nbiru 《蒜》：日、「ヒル」《蒜》

「馬」は、日本語の「カハ・ス」《交、換、替》の語幹 (< kapa-) と比較できるかもしれない。日本語の「カフ」《買う》は、その収縮形であろう。

「馬」ma < ^{*}Nbaha < ^{*}N.paka- < ^{*}[N+]kapa- ?

これも音位転換による変化と見られ、同様の例はいくつかある。

高、「車」^{*}ca < ^{*}caha < ^{*}kaca 《上》：日、「カサ」《嵩 (=高いところ)》

高、「加支」^{*}kaci < ^{*}kacʌ < ^{*}caka 《菁 (=繁茂する)》：日、「サカ・ル」《盛》

ちなみに、この買省郡の地は、(王氏) 高麗時代になって「見州」と改名されている。

來蘇郡、本高句麗買省縣。景德王改名。今見州。(來蘇郡は、もと高句麗の買省縣〔なり〕。景德王、名を改む。今の見州〔なり〕)
(卷第35、漢州)

「買」^{*}me が《見る》を意味したとすれば、日本語「ミ・ル」《見る》の語幹 mi- と対応しているように見えるが、これは高麗時代になってからの改名形であるから、参考資料の価値にとどまる。もし、高麗時代になっても高句麗語の流れを受け継いだことばが使用されていたとすれば、非常に興味ぶかいことではある。

c. 「車」《上》

卷37の「地名表」では、「上忽、一云車忽」(上忽、あるいは「車忽」といふ)とあり、「上」と「車」が対応していたことがわかる。いずれも《城》をあらわす「忽」が使われているので、これだけでは《車(くるま)》を「上」sjaŋ と読んだのか、《上(うえ)》を「車」cʰa と読んだのか判断に迷うかもしれないが、吏読の訓読では《上》を ca と読んだ例があり、高句麗語でも《上》を ^{*}ca のように読んだと見られる。

高句麗語では、単音節語で母音 a を保存しているものは、本来二音節であった可能性が高い。ca は ^{*}caha < ^{*}caka のような形にさかのぼ

り得る。これは日本語の「カサ」《嵩 (= 高い所)》と対応すると考えられるが、音位転換 (*kaca > *caka) が見られる。これと同様の変化は他にもいくつか見られる。

高、「加支」*kaci < *kaca < *caka 《菁 (= 繁茂する)》：日、「サカ・ル」《盛》

高、「加」ka < *ka[h]a < *kaθa < *θaka 《逆 (= 辺)》：日、「サカ・ヒ」《境》

高、「冬非」toŋpi (修正形 *tʌŋpi) < *taŋba < *bataŋ 《円》
：日、「マト」(< mato < *Nbataŋ) 《円》

特に、「加支」《菁》は「昔」《昔》という異形があり、それらのもととなった「且」《豊》を含めると、doublet (双生語) ならぬ triplet (同源三語) になる。「昔」sjək は、子音の音韻変化の整合性を考えると、「籍」cjək の略体字の可能性がある。

「昔 (< 籍?)」cjək < *ceák < *caká 《菁》

「且」ca < *ca[h]a < *caka 《豊》(日本語「サカ・ユ」《榮》)

また、「加」《逆 (= 辺)》に対応するものとしては、「阿」a 《臨む》があるが、これは日本語の「サカ・フ」《逆》と比較できる。

「阿」*+[h]a < *ha[h]a < *θaka

祖形の *θ (日本語では「サ行」音に対応) は規則的に h になるが、*k の音も語頭以外では h になる。それによって成立した *haha は、母音に挟まれた h が弱体化・消滅したことによって *haa となり、さらに収縮が進んだことで単音節化し、別の語のうしろに付加されたことにより、語頭の h が弱体化して a になったと考えられる。同様に、「烏斯押」《猪逆穴》の《逆》でもそれが認められる。

*o.s+[a].ap < *o.s+[h]a.[h]ap

この場合は語頭ではなく、二番目 (以降) に置かれたため、「加」ka ではなく「~阿」+ a となり、《穴》も同じく「甲」kap ではなく「押」ap となり、さらに両者が合体してしまったものであろう。

d. 「骨尸」《朽》

「朽」の解釈も、かなり検討の余地があると考えられる。

朽岳城、本骨尸埤。(朽岳城は、もと骨尸埤〔なり]) (巻第37、
「李勤上奏文」、鴨渚水以北、已降城十一)

この「朽」は「朽」hu《朽ちる》に似ていて、近代に入ってから
の活字本である③の刊本の校訂者は、「朽」を「朽」の異体字と判断した
と思われるが、①と②の古い刊本はいずれも「朽」となっている(図)。
本来「朽」は「朽」o《鏝(こて)》の異体字で、「朽」とは別の字であ
る。なお《岳》をあらわす「押」ap は、鴨緑江以北では「埤」と表記
される傾向が見られる。

日本語の「コテ」《鏝》は、上代語の形は確認されないが、「コ」《子、
小》と「テ」《手》の合成語であろう。ちなみに、中期朝鮮語では「朽」
は hAlk.son (直訳すれば《土・手》) といい、金属製のもの「鏝」は
soj.son (同じく《鉄・手》) と言ったようである(『訓蒙字會』「器皿」)。

日本語の「コ」《子》に相当することばは、接頭辞「コ・マ」《駒=子・
馬》、「コ・マツ」《小・松》のような形であられる場合が多いが、高
句麗語では「滅烏」mjær.o《駒(=馬・子)》や「夫蘇」(<「夫斯」
pu.s+o)《松(=松・子)》の「~烏」(+o < *+huo < *ku'a) のように、
名詞のうしろに接尾辞として付加された可能性が高いので、「コテ」の
形をそのまま比較例として採用するのは適切ではない。

一方、「クツ」《朽ちる》の日本語は、未然・連用形が「クチ」となり、
「骨」kol とは単純に結びつかない。「クチ」の祖形が *kuti であれば、
高句麗語では、*ku が ko になるのはいいとして、*ti は ce のような形
になっていた可能性が高く、語末の流音「~尸」の存在も説明できない。

高、「齊(次)、濟(次)」*ce < *ci < *ti《孔(<乳?)》: 日、「チ
チ」《乳》

意味的にも《朽ちた山岳》では理解しがたい。むしろ《荒れた(山岳)》、
あるいは《崩れた(山岳)》のようなことばを使うのではないか。

「朽」(木製のコテ)は、おそらく壁土を整形するための板が起源となっ
たと考えられる。「骨尸」は日本語の「クレ」《樽(=皮のついたままの
材木、屋根を葺く板)》と対応するかもしれない。語末の流音「~尸」は
*rī (< *ra) にさかのぼる可能性が高いが、直前の流音との間で音

位転換が起こったと考えられる。

「骨尸」 koll < *kolri < *koril' < *kurʌlj < *kuraj / *kulaj

同様の音位転換は《口》を意味する「～忽次」や《峰》を意味する「首泥」「述尔」でも見られる。

高、「～忽次」 *+holc < *kolc < *kul'tu < *kutulj < *kutuj 《口》：
日、「クチ」(合成語「クツ～」) 《口》

高、「首泥」 *sju[n]ni < 「述尔」 *sjulni < *sjunil' < *si'unʌlj
< *si.unaj / *unaj+si 《峰》：日、「ウネ」《畝》、「ウナジ」《項》

ちなみに、《文》を意味する「斤尸」 kɪnl も同様の現象が見られる。
これは朝鮮語の kɪl 《文》と対応するが、その古い姿は(古典)モンゴル語 kelen 《ことば、舌》に反映されている。

kɪnl < *kənlə < *kələn < *kälän

これも、本来語末に置かれるべき子音が、第一音節末に移動していると言える。

e. 「骨衣」《荒》

次に、《朽ちる》ということばにふれたついでに、それと関連のある意味のことば「骨衣」《荒》をとりあげたい。巻37の「地名表」では「骨衣内縣」の名前だけが掲げられており、別名(訳名)は見られない。

荒壤縣、本高句麗骨衣奴縣。(荒壤縣は、もと高句麗の骨衣奴縣
〔なり]) (巻第35、漢州、漢陽郡)

この「骨衣」 kolij (= *kor'e) は、中期朝鮮語 kəc'ɪl- (新羅語「居染」)
《荒》と比較されている⁽³⁾が、頭子音以外の共通点は見出しがたい。
おそらく、日本語の「クユ」《崩れる、朽ちて倒れる》の未然・連用形
「クエ」 kuje (< *kujaj) と対応するのではないか。

kor'e < *kur'i < *kul'ji < *kujil' < *kujʌlj < *kujaj

これも「骨尸」《朽》などと同じく、本来語末にあるべき子音(ここでは流音 .r / .l) が第一音節の母音の後ろに移動している。

f. 「伐」《緑》

《緑》をあらわす「伐」も、「今勿」《黒》と同じく統一新羅時代の改名形としてあらわれる。

緑驍縣、本高句麗伐力川縣。(緑驍縣は、もと高句麗の伐力川縣〔なり]) (卷第35、朔州)

この「伐力」pəl.ljək は、中期朝鮮語の p^hiri-《緑》と比較されている⁽⁴⁾。『訓蒙字會』中、「彩色」の項では《青、緑》を p^hiril とし、《碧》を p^harΛ としている(語末の流音 l は連体形の語尾にあたる)。p^harΛ (< p^hara-)の方が p^hiri- よりも古い発音を反映しているように見える。

「伐」pəl (修正形 *pΛ ~ *pil) が流音で終わっていることを考えれば、日本語の「アキ」《藍》と比較できるかもしれない。高句麗語の p の一部が日本語の「ワ行」に対応することはかつて述べたことがある。

高、「波戸」pal < *pa[h]al' < *baθaj 《桃 (= 稲?)》: 日、「ワセ」
(合成語「ワサ〜」 < *wasaj 《早稲》)

また、「浦」p^ho (= *pΛ)《浦》が漢語からの借用語でなければ、日本語の「ワ」《輪》、「ワダ」《湾曲した地形、入江》の「ワ」(< *ba?) と対応するかもしれない。

「アキ」awi は「アヲ」awo《青》の形を考慮に入れると、*awoj のような形にさかのぼり得る。それはさらに *abu'aj のような祖形を再構できるかもしれない。日本語の「アヲ」《青》については、南島祖語の *avaŋ 《天空》と比較する意見がある⁽⁵⁾が、満洲語の abka 《天、空》(< 女真語「アト哈以」*abuya+i 《天の、天が》)との比較も捨てがたいものがある。

高句麗語では、祖形の語末の半母音 j が流音化 (> .lj > l ~ r) し、さらに音位転換によって第一音節の a が語末に移動し、最終的に母音の弱化によって単音節に収縮したことが想定され、意味的には《天(空) > 青 (> 碧) > 緑》へと変化したものと考えられる。

*abu'aj > [a]bwalj > *pol'[a] > *pΛr[Λ] > *pΛ > *pil

《驍》をあらわすことばは「乃斤」*nΛk であるから、「力」ljək は、むしろ「勒」か「肋」(いずれも lik) の略体字かもしれない。これも接

尾辞的に付加されたことにより、第二音節以降の母音の弱化が進んだのであろう。

高、「乃勿」*nΛ.mil < *na.mal 《鉛》（「毛乙」*mΛ 《鉄》）：日、「ナマリ」《鉛》

「骨乃斤」*kol.nΛk 《黄驍》で古い音が維持されたのは、その地名の記録者の音韻意識が保守的で、分析的であったためであろうか。なお、「乃斤」*nΛk 《驍》は日本語の「タケ・シ」《剛、健》の語幹と対応する可能性がある（『東洋文庫書報』47号、拙論23頁）。

g. 「加兮」《客》

《客》をあらわすことばも、巻37の「地名表」に見える。巻第35、「朔州」管下の「連城郡」の項では「本高句麗各〔一作客〕連城郡（もと高句麗各〔あるいは‘客’に作る〕連城郡〔なり〕）となっているが、画数の多い「客」が本字で、「各」はその略体字であろう。

客連郡。客一作各、一云加兮牙。（客連郡。客、あるいは「各」に作り、あるいは「加兮牙」といふ）

高句麗語の C₂aC₁e は、日本語の C₁iC₂a ~ C₁iC₂o（C は子音を、右下の数字は祖形の順番をあらわす）と対応するから、「加兮」*kahe は *hika にさかのぼり得る。また、hi は ki ~ θi ~ pi のいずれかにさかのぼり得る。

高、「波衣」「巴衣」*pa'e < *[h]ipa 《巖》：日、「イハ」ifa 《岩》

高、「波害」「波兮」*pahe < *kipa 《額（<額）、岨（=峠）》：日、「キハ」kifa 《際》

高、「奈生」*nase[ŋ] < *nasi < *sina 《竹》：日、「シノ」sino 《篠》

高、「奈兮」*nahe < *lahi < *θila 《白》：日、「シロ」siro（合成語「シラ〜」）《白》

ところで、『説文解字』によれば「客」という文字には《寄》という解釈があったようである。

客、寄也。从宀奇聲。（「客」とは《寄》なり。宀〔べん〕に从〔し

たが] ひ、奇の聲 [なり]) (『説文』七・下、宀部)

したがって、《客》は《引き寄せ(られ)る》という意味から発達したことが推定される。これは日本語の「ヒク」《引(=近くに寄せる)》と関係があるかもしれない。「ヒカサル」《引きつけられる》、あるいはその形容詞形「ヒカ・シ」(シク活用)《引きたい》の語幹「ヒカ」から *pika のような祖形を再構できる。

《連(つらなる)》をあらわす「牙」a については、「烏阿忽」《津臨城》の「阿」a 《臨(のぞむ)》と同じく、日本語の「サカ・フ」《逆》の語幹と対応するかもしれない。

「牙」+a < *+[h]a- < *ha[h]a- < *θaka-

意味的には、《対向する>比肩する>連なる》に変化したのであろう。

h. 「燕子」《節》

《節》をあらわす「燕子」mu.cʌ は、表面的には日本語の「フシ」《節》に似ている。高句麗語の u の一部は *ü (または *eü) にさかのぼり得ることから、「燕子」*muc は *müc という形を再構することは可能であろう。モンゴル語には möce / möci 《一刻、時刻》、《四肢、枝》ということばが存在するが、ö は、高句麗語では i ~ ə の音に反映されている可能性が高いことが、比較に難点をもたらしている。

高、「居尸」kəl 《心》: モンゴル語 kökün 《胸、乳房》

上の高句麗語の語末の流音「~尸」は、上代日本語「ココロ」kōkō.rō 《心》の語末の +rō と共通する要素であろう⁽⁶⁾。*kökün という祖形が変化した *kōkã[n] に +rã という接尾辞が付加されたものか。三世紀の高句麗語「桂婁」kueg.lo (修正形 *kuəh[ə].rə < *küägä.rä) 《内、黄(='中央'をあらわす色)》は、「居尸」より古い形を示している。

一方、高句麗語の u が *ü 以外に *iCu (C は子音) にさかのぼることを考えれば、「燕」mu は *mi'u < *mihu のような形を再構することができる。これは *kumi のような音が音位転換した可能性があり、同様の変化を経たものもいくつか挙げられる。

「首」*sju < *si'u < *usi 《牛》(日本語「ウシ」《牛》)

「述」*sjul < *si'u.ʌ < *usi.la- 《軼(=佚)》(日本語「ウシナ・フ」

《失》)

「主」*cju < *ci'u < *uci 《長 (おさ)》 (日本語「ウシ」《大人》)

*kumi は、上代日本語で《こぶ、いぼ》をあらわす「コ・クミ」の「クミ」がそれにあたるのではないか。「コ～」は《子》(「オ列甲類」の ko < *ku'a) と同じものであるろう。

高句麗語では接頭辞ではなく接尾辞の形をとるので、《小さいもの》をあらわす要素「～子」を語尾に付けたのであろう。これは指小辞「～斯」+sʌの変異形で、日本語の接頭辞「サ～」《小～、狭～》にあたることばであると見られる。あるいは、「斯」のかわりに発音・意味が近い漢語起源のことば「～子」+cʌを当てた可能性も考えられる。

4. 検討を要する例

a. 「廻」《足》

《足》をあらわすことばは「廻」と言ったことがわかる。

猪足縣、一云烏斯廻。(猪足縣、あるいは「烏斯廻」といふ)(巻37、「地名表」)

「廻」の音は hoj (単独形、および語頭では *koj か) であることから、その発音に近い上代日本語《蹴る》の連用形、「クエ」と比較する説がある⁽⁷⁾。「クエ」が下二段活用である場合、未然・連用形の語尾は、上代日本語では「エ列乙類」になっていたはずであるから、おそらく *kuwaj のような祖形にさかのぼり、その場合、高句麗語では語末が流音 (.r / .l) になっていた可能性が高い。

たとえば、《釜》を意味する高句麗語の「活」hwal は、日本語「スウ」《据える》の未然・連用形「スエ」(自動詞形「スワ・ル」《坐る》)、あるいは「スエ」《陶 (=土器)》と対応する例が参考になる。

「活」hwal < *huwalj < *θuwaj

筆者は拙論の初篇(『東洋文庫書報』47号、17頁)で、「乎淮(押)」《分津》の地名から「乎」o《津》と「淮」+hoj《分》を導き出し、「淮」を日本語の「クバ・ル」《分、配》の語幹と比較したことがあった

が、この「廻」《足》もそれと同じ起源のことばではないかと考える。

+hoj < *koj < *kuwi < *kūβʌ < *kumba

高句麗語の《足》は、本来《分岐》を意味することばだったのではないか。それに対して、《岐 (=分かれ道)》を意味する「冬斯」、「丁」は、日本語の「テ」《手》と対応するかもしれない。両者はいずれも‘双生語’ (doublet = 同源のふたつのことば) であろう。

「冬斯」toŋ.sʌ (= *tʌŋ.s) < *taŋ+sa / 「丁」*tjəŋ < *teáŋ < *taŋá

日本語の「テ」(合成語「タ〜」)は「冬斯」の「冬」と、「タナ〜」(例、「タナゴコロ」《掌》、「タナスエ」《手な末 = 手先、指先》)は「丁」と、それぞれ対応し得る。

te < *taj < *taŋi / tana+ < *taŋa+

なお、日本語の《手》は南島祖語の *taŋan 《手》と比較する意見がある点を指摘したい⁽⁸⁾。

b. 「古斯」《玉》

《玉》をあらわすことばは、巻35の統一新羅時代の改名形に存在し、巻37の「地名表」には見えない。

玉馬縣、本高句麗古斯馬縣。(玉馬縣は、もと高句麗の古斯馬縣 [なり]) (巻第35、朔州、奈靈郡)

「古斯」ko.sʌ は、朝鮮語の kusil 《玉》、満洲語 gu 《玉》、およびモンゴル語の qas 《玉》と比較されている⁽⁹⁾。ただし、朝鮮語の u は *ü のような音にさかのぼり、高句麗語でも u という形であらわれた可能性が高い。「古」ko は *kü ではなく、*ku か *ka にさかのぼり得る。したがって、「古斯」は朝鮮語 kusil (および日本語「クシロ」kusirö 《釧》)、満洲語 gu (< *gü / *ŋü) と対応する可能性は低いと見なければならぬ。

もし、「古斯」(修正形 *kas) が *kas にさかのぼるのであれば、まさにモンゴル語 qas 《玉》の方と対応する。ただし、この地名「古斯馬」は、「古斯」の部分は《玉》と訳されているが、「馬」の部分は訳されていない。その点では不完全な訳といえる。

なお、「古斯」と類似した発音の「古斯也忽次」《獐項口》という地名については、「～忽次」が《口》を意味することばであることは問題ないが、「古」は日本語の「カ」《鹿》と、「斯也」《項（うなじ=首のうしろ）》は「セ」《背》と対応すると考えられる。あるいは「～斯」を指小辞と考えて、「古斯」ko.sʌ (= *kʌ.s < *ka.sa) 《獐（=小鹿、ノロ）》と「斯也」sʌ.ja (= *sja < *sija) 《項》に分析できる可能性もある。

「古所於」《獐塞》の例を見ると、「古」が単独形のように見えるが、「烏生波衣」《猪闌峴》の場合は、《猪》をあらわす「烏斯」o.sʌ (= *o.s) の「～斯」が消滅していることから、「生」sʌiŋ (= *seŋ) 《闌》のようにsで始まることばの前では、「斯」は同化してしまったのではないか。同様に、「所於」sjo.ə 《塞》もsで始まっているので、「古斯」も「斯」が同化・消滅した可能性が考えられる。

なお、「所於」の「所」は、万葉仮名では「オ列乙類」の「ソ」sō ~ sə をあらわし、oよりも前舌寄りの母音になることを考えれば、高句麗語の「所於」は*säkäのような祖形にさかのぼり得る。おもしろいことに、高句麗語でも日本語「ソコ」《塞》と同じく二音節語になっている。漢語起源であれば、当然単音節(saj < *səg)であったはずである。

c. 「烏斯含」《兎》

《兎》をあらわすことばは、巻35の統一新羅時代に改名された地名に見えるが、巻37の地名表には「烏斯含達」とあるだけで、別名（意訳形）は存在しない。

兔山郡、本高句麗烏斯含達縣。（兔山郡は、もと高句麗の烏斯含達縣〔なり〕）（巻第35、漢州）

これも従来より日本語の「ウサギ」《兎》やギリヤーク語（ニヅフ語）のosk《兎》と比較されてきたことばである⁽¹⁰⁾。「烏斯含」o.sʌ.ham は確かに日本語の「ウサギ」に似ているが、厳密には対応していない部分がある。

「ウサギ」の語末の「～ギ」は「イ列甲類」の「ギ」giであり、上代

日本語の濁音は前に鼻音が存在したことが推定されるから、*N.ki (Nは鼻音をあらわす) のような形を再構できる。日本語の ki は、祖形が短母音の *ki であれば、高句麗語では *ke という形になり、語頭以外では *+[h]e の形で出現する。祖形が長母音の *ki: であれば、語頭以外では *+[h]i の形で出現したはずであるから、「含」ham は、それらとは母音が対応しない。

高句麗語では多音節語の第二音節以下の母音 a は弱化して i または ø (ゼロ) になった可能性が高い。*usaŋ.ki ではなく、*usaŋ.ka であれば *os.h[i] (または *osx[i]) のような形になり得る。同様の対応を示す例として、《道》をあらわす高句麗語の「都」to (< *ta) と日本語の「チ」(< ti < *ti) との関係については、拙論の初篇 (『東洋文庫書報』47号、13頁) でふれておいた。

それに《穴》か《岳》をあらわす「押」+ap の変異形 +am ということが付加されたのが「烏斯含」になったのではないか。+ap と +ham の対応については、《窮嶽》を意味する「阿珍押」(巻第37「地名表」と「阿珍含」(巻第6「新羅本紀」6)の例がある。

*usaŋ.ka の鼻音 ŋ の消滅については、《城》をあらわす「省」sjəŋ が「西」sjə になっている例もあり、不規則なものではない。なお、日本語の「ウサギ」《兎》を南島語の musaŋ 《野猫》と関連づける説は興味がある⁽¹¹⁾。

d. 「伊伐支」

「伊伐支」(音読形は i.pəl.ci) 《鄰豊》という地名がある。これも統一新羅時代に改名された形であり、中期朝鮮語の i'uc (現代語 i'us) 《隣》に比定されているが、完全には対応しておらず、《豊》を意味する要素の解釈も欠落している⁽¹²⁾。

そもそも、この「伊伐支」の「伊」は、必ずしも i と読まれたわけではない。巻37の「地名表」では「伊伐支縣、一云自伐支」(伊伐支縣、あるいは「自伐支」といふ) となっており、《伊 (これ)》を「自」ca (< *ca) と読んだことを示している。これは日本語の「ソ」(< sō < *cā ?)、または「サ」《其 (それ)》と対応し得る。

これを「地名表」のように、《伊（これ）》を「自」cʌ と読んだ場合、「自伐」cʌ.pəl（修正形 *capil）は *capa.ra か *capaj のような祖形にさかのぼり得る。日本語に対応語を求めるとすれば、「サハ・ル」《触、障》の未然形「サハ・ラ」か、その他動詞「サフ」の未然・連用形「サへ」（< safē）の形に反映され得る。

日本語の「トナリ」《隣》は、「ト」《外》（上代語は「オ列甲類」の「ト」to）と「～ニ・アリ」《～に在る（もの）》の合成語かと思われるが、高句麗語では《接触している（もの）》というのが原義だったのでないか。

語末の「～支」+ci（= *+ci）《豊》は、同じく《豊》を意味する「且」ca が、あたかも接尾辞のように語末に付加されたことによって、さらに母音の弱化が進んだものであろう。

*+ca > *+cʌ > *+ci

「且」ca が *caka にさかのぼり、日本語の「サカ・ユ」《栄》の語幹と対応することは、これまでも述べたとおりである（『東洋文庫書報』48号、拙論11頁）。これも「毛乙」mo.il（= *mʌl < *mal）《鉄》に対する「乃勿」《鉛》の「～勿」+mül（日本語「ナマリ」《鉛》の「～マリ」）の音韻変化と対応している。

まとめ

今篇では、初篇と続篇（『東洋文庫書報』47号〔2016〕、48号〔2017〕）の中で扱えなかったものを発表させていただくことにした。特に、「補遺」の形で‘音位転換’（metathesis）の事例を説明したが、高句麗語の音韻変化の中で、音位転換の占める位置は想定以上に重要なものである。

高句麗語には数詞や身体名称以外にも、動詞や形容詞（の語幹）のような基礎語彙が少なからず残されているが、日本語との間に対応関係が見落とされたのは、こうした特殊な音韻変化に気づかなかったためではないか。ただし、‘特殊な変化’といっても、明らかに法則性が存在している。

また従来、日本語や他の言語（朝鮮語を含む）と表面的に類似しているように見えた比較例の中には、音韻変化の法則上、疑問点のあるものが見られるので、ここにとりあげさせていただいた。比較例を挙げる場合、直観的な類似よりも規則的に変化しているかどうかが重要である。

註

- (1) 李基文「高句麗の言語とその特徴」4.「語彙の特徴」(7)、137頁。
(『白山学報』4号、白山學會、1968年所収)
- (2) 李基文『韓国語形成史』五、「高句麗語」II.「高句麗語語彙」、79-80頁。
(『韓国文化史大系』V、「言語・文学」上、高麗大学校民族文化研究所、1967年所収)
- (3) 村山七郎「高句麗語資料および若干の日本語・高句麗語音韻対応」、71頁。
(『言語研究』42号・「第46回大会研究発表報告要旨」、日本言語学会、昭和37年〔1962〕所収)
李基文『韓国語形成史』五、「高句麗語」II.「高句麗語語彙」、86頁。
- (4) 李基文『韓国語形成史』五、「高句麗語」II.「高句麗語語彙」、85頁。
- (5) 村山七郎・大林太良『日本語の起源』、弘文堂、昭和48年〔1973〕、207頁。
- (6) 村山七郎『日本語の語源』、弘文堂、昭和49年〔1974〕、11頁。
- (7) 村山七郎「高句麗語資料および若干の日本語・高句麗語音韻対応」、70頁では *kuwə-* とする。
- (8) 村山七郎『日本語の研究方法』、弘文堂、昭和49年〔1974〕、113頁。
- (9) 李基文『韓国語形成史』五、「高句麗語」II.「高句麗語語彙」、83頁。
- (10) 李基文『韓国語形成史』五、「高句麗語」II.「高句麗語語彙」、82頁。
同じく「高句麗の言語とその特徴」4.「語彙の特徴」(7)、137頁。
- (11) ポリワーンフ「日本語の音楽的アクセントに関する研究について」、85頁では、マライ語 *musaj* 《じゃこう猫》とするが、編訳者によりタガログ語 *musaj* 《野生猫》と訂正。(E.D. ポリワーンフ著、村山七郎編訳『日本語研究』、弘文堂、昭和51年〔1976〕所収)
- (12) 李基文『韓国語形成史』五、「高句麗語」II.「高句麗語語彙」、83頁では *i'us* の祖形として **iBič* を再構する。

朽岳城本骨尸埤

刊本①

朽岳城本骨尸埤

刊本②

朽岳城本骨尸埤。

刊本③

図 卷37「地名表」朽岳城

利巴利忽	朽岳城本骨尸坤	檫木城
鴨淥以北逃城七		
鉉城本乃勿忽	面岳城	牙岳城本皆尸坤
忽	鷲岳城本甘彌忽	積利城本赤里忽
木銀城本召尸忽	犁山城本加尸達忽	
鴨淥以北打得城三		
穴城本甲忽	銀城本折忽	似城本史忽
都督府一十三縣		
嶠夷縣	神丘縣	尹城縣本悅已
本古良夫里	散昆縣本新村	安遠縣本仇
		麟德縣

刊本①卷37「李勣奏狀」一部

多伐蕪州

安市城舊安守忽

或云九郡城

鴨淥水以北已降城十一

掠島城

木底城

藪口城

南蘇城

甘勿主城本甘勿伊忽

麥田谷城

心岳城本居戶埤

國內州不祚

或云樹邦島城

肩夫婁城本肖利巴利忽

朽岳城本骨戶埤

櫟木城

鴨淥以北述城七

鉦城本乃勿忽

面岳城

牙岳城本皆戶押忽

鷲島岳城本甘弥忽

積利城本赤里忽

木銀城本召戶忽

十六

加賀本新刊
本上文邦岳
作耶巖文獻
備考作那岳
邦疑那訛

市城舊安寸忽。或云九郡城

鴨渚水以北已降城十一

椋岳城 木底城 藪口城 南蘇城 甘勿主城本甘勿伊忽。

麥田谷城 心岳城本居尸埤。國內州云一耐云一耐 屑夫

婁城本肖利巴利忽。朽岳城本骨尸埤。櫟木城

鴨渚以北逃城七

鉛城本乃勿忽。面岳城 牙岳城本皆尸埤忽。鷲岳城本甘

彌忽。積利城本赤里忽。木銀城本召尸忽。犁山城本加尸

達忽。

鴨渚以北打得城三

三國史記 卷三十七

十二

